第３分科会提案

「次世代の育成　①職員研修と支援力の強化②経営と人材育成」

ＮＰＯ法人アクティブセンターうだ
廣瀬　朋

１．はじめに

①奈良県宇陀市とは・・・。

奈良県北東部に位置する中山間地。平成１８年大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村が合併してできた町である。山林が７２％、宅地４％弱の面積比

現在、人口は３２２３２人(２０１７年２月現在)であり、その内６５歳以上の方が１１６２６人である。

②ＮＰＯ法人アクティブセンターとは・・・。

「入所施設に行きたくない。」という声から始まった。

平成１９年に２つの無認可の作業所が合併して、ＮＰＯ法人格を取得。日中の活動は生活介護に移行する。

≪日中活動支援　生活介護≫

アクティブセンターうだ　利用者１６名

ココット　利用者　９名

≪生活支援　居宅介護　移動支援等≫

サポートセンターぴっける

２．これからのことを考える

①制度の中でサービスを提供する　＝　障害福祉の仕事になりつつあるのではないか？

サービスメニューがあり、それを消費して・・・そんな消費化されていくものが本来の福祉だっただろうか？

いつのまにか、制度が整っていく中で、福祉は“消費される”ものになってしまったのなら、だからこそ今一度「原点」を確認すべき必要がある。

◆いわゆる制度の中の「サービス」だけで暮らしは成り立つのだろうか？

そもそも「地域で自分らしく生きる」ことを支援すると教えこまれながら、障害福祉サ

ービス事業の従事者と言われ事業の中で“仕事”をしている毎日。これを続けていくことが「自分らしく生きる」ことにつながるのか。
また、制度が整い、適切なサービス提供が行われ、食べるものがある、住むところにも困らない、病気やけがをしても安心な医療体制などただ生きるということに関して整えば人は満たされるのであろうか。それが「自分らしく」なのだろうか。

◆“障害者”が生きるではなく、“人”が生きるということ、暮らしの質や価値観を議論するべき。
・　「地域」か「入所」かの議論
・　サービスでは補えないけど、「自分らしく」あるにはかかせないモノ
・　人間関係
・　地域の中での役割

これは狭い意味での「障害福祉」の話だけではない。「地域」のリアリティを観ていくと、「貧困」というキーワードもからみ、すそ野は広がっていく。身近な社会問題そして本質的な問題として、この「暮らしの質」を問うためには“障害者”の暮らしを追及するのではなく、“人”の暮らしを追及するべきではないだろうか。

◆本人中心のコミュニティづくり　本人が地域の中で様々な関係を構築し、役割を担っていくことへの支援
・　固有名詞のあるＡさんの存在。生活の実体像を伝える力
・　支援者が持つべき「社会性」という力

②社会問題を考え議論する場をつくる
≪うちの法人で行なっていること≫
・　沖縄の基地問題
・　東日本大震災　応援活動

◆色んなところで色んな人が生きている。自分の「社会」を広げる機会。
・　磨かれる感性
・　支援者が持つべき「市民性」という力
・　問われる「私」という個人

出会いを通して、現場で起きていることやそこで生きる人の思いや暮らしのリアリティを学ばせてもらい、できることに関わらせていただきながら歴史や背景を学び“自分

事”として考えることが重要である。自分やったらどうなんやろうか？と常に考えられるように。

◆「市民」として芽生える感情をエネルギーに

・　何気ない日常から見えてくる大切なモノ、何とかしたい課題
・　国がどうだ～だけではない、目の前の人、そこからその人の地域へ
・　自分の「仕事」が「社会」につながっているということ

“弱い”や“少数派”といわれる人や地域に社会の矛盾を押し付けて成り立つような社会を私たちは望むのか？ということを考え、議論する。

## ３．まとめ

・　「障害者」の暮らしではなく、固有名詞を持った「人」の暮らしの追及。
・　「地域」コミュニティをつくっていくために必要な力「社会性」と「市民性」
・　いいことも悪いこともあって、でもおもしろく生きている何気ない日常
・　あかんもんは“あかん”と言える強さ